はじめに

私が今回、卒業論文で「総合的な学習の時間」を取り上げることとなったきっかけは、自身の就職活動である。

3 年生の終わり頃から始めた就職活動は私にとって衝撃的であった。高校も大学も進学先は成り行きというか、たいして深く考えることなく決めてきた私が、自分がどのように生きていくかということ、自分自身について自分の将来について、この就職活動の『経験』を通し初めて真剣に考えさせられることとなったからだ。肌身に感じるもの、インパクトなど、実際の経験や体験から受けるものの強さを実感した。それは、これまで学校を中心とした生活を送ってきた中で、就職活動のような社会と直接関わる機会というのがあまりなかった中で、受けたことのないレベルの強さであった。

学習指導要領の改訂に伴い、体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に行うとした「総合的な学習の時間」が新設された。私は、この時間が子どもたちに、これまでの教育において不十分であったと思われる、社会との関わりの中で自分はどう生きていくかを考えるきっかけを与えてくれるのではないかと考え、論文のテーマとして設定した。

果たして「総合的な学習の時間」は、その効果に期待のできる代物なのであろうか。実際の現場にあたることを中心に、この時間について、見て考えていきたいと思う。